

古楽器の現在

Renaissance & Baroque Instruments in Contemporary Context
Towards new timbres and unique instrumental combinations

~*NymphéArt* (ニンフェアール) features **Garth Knox & Tosiya Suzuki** ~

ガース・ノックス(ヴィオラ・ダモーレ/ヴィオラ) & 鈴木俊哉(リコーダー)



“Infinite Light from 6 billion kilometers, Quaroar (2005)”

「60億キロかなたクワオアからの無量光」

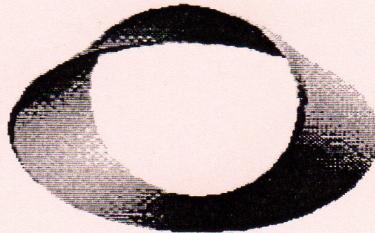
Miyuki Ito (composer)
伊藤美由紀(作曲家)



“Mutation of the Möbius (2005)”

「メビウスの変容」

Kumiko Omura (composer)
大村久美子(作曲家)



2005国際芸術フェスティバル参加/名古屋市港文化小劇場企画公演

2005・5・21(土) 14:00開演/13:30開場

名古屋市港文化小劇場

Nagoya City Minato Playhouse, Saturday, May 21, 2005, 2:00pm
～サントリー音楽財団推薦コンサート～

～ ごあいさつ ～
GREETING

本日はお忙しい中、*NymphéArt*（ニンフェアール）プロデュース「古楽器の現在」の演奏会にご来場頂き、有り難うございます。

この度、2005国際芸術フェスティバル参加 / 名古屋市港文化小劇場企画公演として、国際的に著名なお二人の演奏家である、愛知県出身のリコーダー奏者の鈴木俊哉さんとイギリス人のヴィオラ／ヴィオラ・ダモーレ奏者のガース・ノックスさんを迎えた公演を催すこととなりました。

リコーダーとヴィオラ・ダモーレという、共に現在オーケストラで演奏されている楽器より、さらに古い時代から演奏されていた楽器を使い、古典の名作から現代に生きる作曲家の作品までを演奏する、ということから、公演名の「古楽器の現在」と名づけました。プログラム前半は、両楽器の為にアレンジされた作品を含め、古典作品を主体に、後半は、現在、国際的に活躍している作曲家による作品を主体に構成されています。また、この公演のために作曲した、伊藤・大村による両作品は、本日、世界初演となります。二人の名演奏家によって、古典作品には新たな息が吹き込まれ、現代作品においては未来に続く可能性を感じさせる新鮮な響きが紡ぎ出されていくことでしょう。そのような「古楽器の現在」を皆様にお楽しみいただければ幸いに存じます。

最後に、「古楽器の現在」という画期的な企画を名古屋で開催する事ができますのも、(財)名古屋市文化振興事業団、2005国際芸術フェスティバル協議会メセナネットワーク協賛企業の方々、その他、関係者皆様の御協力によるもので、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

2005年5月21日
NymphéArt（ニンフェアール）代表：伊藤美由紀 / 大村久美子

ニンフェとは、フランス語で睡蓮（すいれん）の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これから可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。



～ プログラム～
PROGRAM

1. 作者不詳: リコーダーソロの為の サルタレロ (14世紀)
Anonymous: *Salterello* for recorder solo (14th century)
2. マラン・マレ: リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の ラ・フォリア (1685)
Marin Marais: *Folies* for recorder and viola d'amore (1685)
～リコーダーについての解説（鈴木俊哉）～
3. J.S.バッハ: リコーダーとヴィオラの為の 前奏曲二短調 (平均律1巻の二短調 BWV851より)
J.S. Bach: *Prelude d-moll BWV851* for recorder and viola d'amore
編曲: 鈴木俊哉 / arrangement by Tosiya Suzuki
4. アッティリオ・アリオスティ: ヴィオラ・ダモーレの為の 練習曲第1番
Attilio Ariosti: *Primera Lezione* for viola d'amore
5. 作者不詳: リコーダーソロの為の 鶴の巣篭 (尺八本曲より)
Anonymous: *A Brooding Crane* for recorder solo (Shakuhachi traditional)
6. 大村久美子: リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の メビウスの変容 (2005) 世界初演
Kumiko Omura: *Mutation of the Möbius* for recorder and viola d'amore (2005) (WP)

—————休憩—————
intermission

7. トリスタン・ミュライユ: ヴィオラの為の
わたしの妹、花嫁は、閉ざされた園。閉ざされた園、封じられた泉…(1976)
Tristan Murail: *C'est un jardin secret, ma sœur, ma fiancée, une source scellée, une fontaine close...* for viola (1976)
8. 細川俊夫: リコーダーソロの為の 線 1b(1984/2000)
Toshio Hosokawa: *Sen 1b* for recorder solo (1984/2000)
～ヴィオラ・ダモーレとヴィオラについての解説（ガース・ノックス）～
9. サルヴァトーレ・シャリーノ: ヴィオラの為の 3つの華麗なるノクターン(1974-5)
Salvatore Sciarrino: *Tre notturni brillanti* for viola (1974-5)
10. 伊藤美由紀: リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の
60億キロかなたクワオアからの無量光 (2005) 世界初演
Miyuki Ito: *Infinite Light from Six billion kilometers, Quaroar* for recorder and viola d'amore (2005) (WP)

ガース・ノックス (ヴィオラ・ダモーレ、ヴィオラ)/ Garth Knox (viola d'amore, viola)
鈴木俊哉 (リコーダー)/ Tosiya Suzuki (recorder)

伊藤美由紀 (企画、作曲、司会)/ Miyuki Ito (composer, coordinator, interpreter)
大村久美子 (企画、作曲)/ Kumiko Omura (composer, coordinator)

～曲目解説～ PROGRAM NOTES

1. 作者不詳：リコーダーソロの為の「サルタレロ」（14世紀）

サルタレロとは、中世の6拍子のテンポによる、早い単旋律の舞曲である。今回は、14世紀に書かれた15曲の器楽曲を含む“トレチエント写本”の中から「サルタレロ」を演奏します。A + X, B + X, C + X……のように、X(反復句)に戻って来る形式です。

2. マラン・マレ：リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の「ラ・フォリア」（1685）

マラン・マレ（1656—1728）は、ヴェルサイユ宮殿で活躍したヴィオラ・ダ・ガンバ（弦楽器）の名手で、フランスのヴィオラ・ダ・ガンバ音楽を代表する作曲家である。当時の流行であったイギリスのヴィオール（弦楽器）を使って通奏低音の上に変奏曲を書くという傾向に影響をうけた。前奏曲に続き、ポルトガルを起源とする有名な「ラ・フォリア」の旋律に基づいた16の変奏曲がある。16世紀から始まり現在まで、一コレルリ、ヴィヴァルディ、ヘンデル、J.S.バッハ、ラフマニノフ、ヴァンゲリスまで一数々の作曲家により、各種の楽器の為に、「ラ・フォリア」の旋律は、使われている。300年以上の間に、150以上の作曲家によって数々の変奏曲が作られているとも言われている。（伊藤美由紀）

3. J.S.バッハ：リコーダーとヴィオラの為の「前奏曲二短調」（平均律1巻より）

J.S.バッハ（1685—1750）は、鍵盤楽器の為にも数々の名作を生み出しているが、平均律クラヴィア曲集は、よく知られているインベンションやシンフォニアと比べて技術的にも内容的にも高度なものとなっている。24の調によって作られた各曲はすべて前奏曲とフーガから構成されており、全2巻のうちの第1巻は、1722年に作曲されている。本日演奏されるのは、二短調の前奏曲を鈴木俊哉がリコーダーとヴィオラのために編曲した版であり、このピアノソロの名曲がどのような新しい音の色彩を帯びるのかが聴きどころである。（大村久美子）

4. アッティリオ・アリオスティ：ヴィオラ・ダモーレの為の「練習曲第一番」

イタリア・バロックのアッティリオ・アリオスティ（1666—1729？）は、作曲家であると同時に歌手であり、鍵盤楽器やヴィオラ・ダモーレ、チェロの名手としても知られている。17世紀後半から18世紀に人気のあったヴィオラ・ダモーレは、あごの下で支えてヴァイオリンのように演奏するが、多くは、5～7本の演奏弦と同数の共鳴弦をもつ特殊な楽器である。おそらくこの楽器を弟子に教える為に書かれた「練習曲第一番」は、3つの小曲からなる。（柴辻純子）

5. 作者不詳：リコーダーソロの為の「鶴の巣篭」（尺八本曲より）

尺八の本曲である「鶴の巣篭」は、全国に色々なバリエーションとして残っており、また流派によっても異なって伝わっている。古くは胡弓の曲から伝わったといわれており、今回は、さらにリコーダーのために編曲されている。夜明けの描写から始まり、鶴の親子の親愛の象徴をあらわしているともいわれている。（鈴木俊哉）

6. 大村久美子：リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の「メビウスの変容」（2005）世界初演

メビウスとは、メビウスの輪、あるいは帯、と呼ばれ、19世紀のドイツ人數学者メビウスにより発見された表裏がなく面が1つしかない立体のことであり、永久に続く環状の帯のことです。この世の中における、例えば雲から雨となって海に流れ出、水蒸気となって天に昇る水、植物の光合成と人間の呼吸によって入れ替わる空気、体内を巡る血液、はまた、人間の生と死における輪廻転生まで、自然によるあらゆる創造物は循環するものからなっていると言っても過言ではありません。一方、悪循環という言葉もあり、単に循環といつても良い方向、悪い方向にいくものなど、さまざまな様態があります。この作品において、私は、輪廻、という生きとし生けるものが逃れることのできないものにおいて、悪循環に陥ることなく転生し、その果てには新たなる光に満ちた別世界へ出離すべく変容する様子を表現しようと思いました。それは、私達人類の明るい未来への希求であり、私自身の今までの殻を抜くぞとする意志の表明でもあります。（大村久美子）

7. トリスタン・ミュライユ：ヴィオラの為の「わたしの妹、花嫁は、閉ざされた園。閉ざされた園、封じられた泉…」（1976）

フランス人作曲家（1947～）。タイトルは、旧約聖書からの一文である。「わたしの妹…」は、大作にしようとする意図をもっていないので、ある意味で、親しみやすく、ミニチュアのような作品である。友人の結婚式のために作曲された。心臓の鼓動のようなリズムと、加速、減速されるスピード感の2つのアイデアに基づいている。ミュライユは、これらの2つの自然な要素によって、飾り気なく動いている作品に、小さな驚異を与える。冒頭の部分に興味深い変化がある。息によって生じるホワイトノイズが音になり、その音が、心拍のリズムで刻む。クレッシャンドーアッチエレランドで少しずつ音色、音高を変えてゆき、倍音を加えていく事により、和音になる。いわゆる、“真の意味での音”—基音として響く。殆ど何も存在しないところから、穏やかな推移を経て和音へと動いていく。それは、一種の不斷の変容である。

* Garth Knox spectral viola (WDR3/CD)より（ガース・ノックス/日本語訳・伊藤美由紀）

8. 細川俊夫: リコーダーソロの為の「線 1b」(1984/2000)

「『線』とは、東洋の書で見られるような毛筆の線である。禅僧は、一本の線を、混沌開基の一点からはじめ、白紙の上を通過し、再び混沌開基の一点に帰っていく線運動によって描くという。目に見える線は、目に見えないダイナミックな余白によって生かされている。この作品もこの線運動のように、音の生み出される場所を常に想定して作曲されている。東洋では、声(音)は、気が息を通して地上に顕われる時に、生まれるという。気—息—声(音)という音の生み出されるダイナミックなプロセスを表現する事が、この作曲の中心課題であった。時間構造は、奏者の息からひきだされたもので、この息の円運動の中に、音が生起する。息から生みだされた時間の箱に、音を垂直的に打ちこんでいく。時間は、垂直に螺旋状を描いて展開する。音が背景(音の間)をつくっていくのではなく、逆に背景は母胎となって、一音一音を生みだしていく。その音は、線であり、線の凝集した点であるが、それは複雑な様相をもつ。一つ一つの音は、息音や声、あるいは楽器からのノイズによって、通常の音(倍音を多く含んだ音)を異化していく。」*

「線1b」は、フルートのために書かれたものを、リコーダーのためとした改訂版です。(細川俊夫)

* 細川俊夫作品集「うつろい音宇宙1」(ファンテック)より

9. サルヴァトーレ・シャリーノ: ヴィオラの為の「3つの華麗なるノクターン」(1974-5)

イタリア人作曲家(1947~)。「3つの華麗なるノクターン」のなかでは、どの音をとっても“普通に”演奏されるものはない。全てが、ハーモニクス、トリル、トレモロなどの連続である。しかし、70年代初期に探求され拡張された多くの楽器のテクニックとは異なり、シャリーノは、楽器を不自然に扱う事に目を向けるのではなく、むしろ、自然な特性を極限までつきつめようとしている。シャリーノは、同じテクニックを、他の弦楽器にも試みた。ヴィオラでは、暗く、又、きらめくような、特別な音質をもたらすようとしている。その特徴は、わずかに矛盾してはいるが、華麗なるノクターンのポスト・ショパン風の意向を正当化する。又、楽譜の冒頭に書かれている、人類学者アルフレッド・メトローの言葉によって喚起される。「星は、凍りついた火で夜を照らす女性のようである。彼女たちに触れる事は危険である。爆発するかもしれない」。第1曲目は、気まぐれなモザイク風の作品である。6つの要素が、絶えず繰り返されるが、毎回、微妙に変化している。第2曲目は、耳に聞こえるかどうかのわずかな音量により、中断されながらのハーモニクスの連続で始まる。そして、しばらくの間、耳障りなヴィブラートーグリッサンドによりのみこまれる。第3曲目は、高音域でのグリッサンドと敏速な前打音の交錯である。弓が、前後にブリッジからフィンガーボードへと滑ることによって、厳密な同一性は、絶えず破壊されていく。(リチャード・トゥープ/日本語訳:伊藤美由紀)

10. 伊藤美由紀: リコーダーとヴィオラ・ダモーレの為の「60億キロかなたクワオアからの無量光」(2005) 世界初演

2002年6月にカリフォルニアの天文台で、小さな天体が発見された。その天体は、ロサンゼルスの郊外に住んでいる先住民の神話から、クワオアと名づけられた。神話の中で、クワオアは、万物の創造神である。この作品を、構想している時に、たまたまこの話を見つけ、同時に、カリフォルニア郊外のアーティストコロニーで作品制作を行う事が決まっていたこともあり、この神話と天体に、強い関心を惹かれた。想像を越えるほど遠い60億キロかなたからの光のスペクトラを、音のスペクトラに想い描きながら、繊細で今にも消えてしまいそうであるが、微妙に変化する音色、又、創造神の生命力の逞しさのような音の厚い重なりを、繊細な音色をもつ古楽器であるヴィオラ・ダモーレとリコーダーで創造しようと試みた。天体の公転のように、作品は、D音から始まり、様々な音による空間を通ってD音に戻る。また、ヴィオラ・ダモーレの調弦を変え、音色の変化を探求した。遠くかなた宇宙での天体の衝突、光の反射などからのイメージを、息、舌打ち音、キーノイズ、重音、楽器をたく音、声、ウッドチャイムなどの複雑な音色の交錯により、色彩のある時間空間を浮かびだそうとした。(伊藤美由紀)

～プロフィール～

ABOUT THE PERFORMERS



ガース・ノックス（ヴィオラ・ダモーレ、ヴィオラ）

Garth Knox (viola d'amore, viola)

アイルランドに生まれスコットランドで育つ。ロンドン王立音楽院に学び、パロックから現代まで幅広いレパートリーをこなすヴィオラ奏者としてキャリアをスタートさせる。1983年、ピエール・ブーレーズの招きで、アンサンブル・アンテルコンタンポラン（パリ）のメンバーとなり、ブーレーズ指揮の協奏曲を含む多くのソロ作品、室内楽を、演奏ツアーや国際的な音楽祭で演奏する。1990年にはアルディッティ弦楽四重奏団に参加し、リゲティ、クルターグ、ペリオ、クセナキス、ケージ、フェルドマン、シュトックハウゼン等、現代を代表する作曲家たちの作品の初演を担当する。1998年よりソロ活動に専念するため弦楽四重奏団を離れる。ソリストとして、ヘンツェ、リゲティ、ユニトケ、ベンジャミンなど多くの作曲家の作品を初演。最近では、ブリュッセルやウィーン、パリでのリサイタルを行い、またタベア・ツィマーマンとの共演によるエトヴェシュのヴィオラデュオの世界初演や、キム・カシュカシアントとのデュオコンサートシリーズ等がドイツで放送された。ヴィオラ・ダモーレによる新しい音楽にも積極的に取り組んでいる。現在、パリを拠点に、ソロ、室内楽、オーケストラとの共演でヨーロッパ、アメリカ、日本で演奏。また、Musikene（サン・セバスチャン、バスク）のヴィオラ教授。CDも多数リリースしている。



鈴木俊哉（リコーダー）

Tosiya Suzuki (recorder)

1961年生まれ。アムステルダム・スヴェーリング音楽院卒業。リコーダーを花岡和生、ワルター・ファン・ハウヴェに師事。リコーダーの可能性と技術の開拓に取り組む。L.コーリ、B.ファーニホウ、L.フランチェスコーニ、原田敬子、細川俊夫、伊藤弘之、中村齊、野平一郎、U.ロイコ、S.シャリーノ、G.シユテーブラー、湯浅譲二といった作曲家たちと共同作業をおこない、彼等の作品を初演する。ウィーンモデルン、チューリッヒ新音楽の日、国際ガウデamus音楽週間、ダルムシュタット夏期講習会、ISCM世界音楽の日々（1995・2000・2001・2002）、秋吉台国際20世紀音楽セミナー＆フェスティバル

ル、パリの秋、武生国際音楽祭、ロワイヨモン音楽セミナー、コンポージアム2000（東京オペラシティ）、ヨーロッパ・アジア国際現代音楽祭、クラシック・シュープーレン、トンヨン国際音楽祭、フェスティバル・ア・テンポ等の音楽祭にソリストとして参加。ヨーロッパ、アメリカ、ベネズエラ、トルコ、香港、韓国、台湾、日本等で現代奏法に関するワークショップやリサイタルを行う。2001年より笙の宮田まゆみとデュオを組む。名古屋市民芸術祭賞（1994）、ダルムシュタット奨学生賞（1994）、ダルムシュタット・クラニッヒシュタイナー賞（1996）受賞。ミュージックスケイプよりソロCDをリリース。2002年のダルムシュタット夏期講習会講師。

楽器の紹介

ヴィオラ・ダモーレ：17世紀の終わり頃にヨーロッパ大陸で、頻繁に使用された。A-d-a-d'-f(♯)-a'-d' の調弦で、7本のガット弦と各々に対応した7本の共鳴弦をもち、お互いが共鳴する事によって微妙で繊細な音色を生み出す。また、名前のヴィオラ・ダモーレは、「愛のヴィオラ」を象徴するとともに、「ムーア人（イスラム人）のヴィオラ」が、語源でもある。

リコーダー：16世紀ごろ盛んに使用された。リコーダーの語源は、エリザベス朝の古語英語で、「小鳥のようにさえする」意からきている。ルネッサンス式リコーダーは、バロック式リコーダーに比べて、音域が少し狭く、微妙に音色も異なる。19世紀にフルートにその地位を奪われたが、20世紀に入り、現代作曲家によりリコーダーの為の作品に様々な前衛的な試みがなされている。また、教育楽器としても盛んに使われるようになった。

ABOUT THE COMPOSERS

伊藤美由紀（作曲家）

Miyuki Ito (composer)

名古屋出身。愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(ニューヨーク)、コロンビア大学博士課程(ニューヨーク)修了。芸術音楽博士。寺井尚之、ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユ、フィリップ・ルロー他、各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて、電子音楽の研鑽を積む。神奈川県合唱曲作曲コンクール、アボット室内楽作曲コンクール、ボリス＆エドナ・ラポポート賞、名古屋文化振興賞など、受賞。主要作品として、レジナンスフェスティバル(パリ)で初演、ICMC 国際コンピューター音楽会議 2004 入選-コンピューターとソプラノの為の「古代の息吹をしのぶ。。。」、カーネギーホール(NY)にて初演、ISCM 世界音楽の日々 2002 香港(国際現代音楽協議会)入選-室内楽「Fading Beauty…」、ハーモニアオペラカンパニー(NY)委嘱作品-オペラ「プリンセス・カグヤ」、東京オペラシティシリーズコンサート“B to C”天羽明恵のソプラノリサイタルの為の委嘱作品-「宇宙の幽遠の果てをめざして」、武豊町輝きホール実行委員会による委嘱作品-笙、薩摩琵琶、コンピュー

ター、映像の為の「生生流転」などがある。Centre Acanthes(フランス)、ダルムシュタット現代音楽フェスティバル(ドイツ)に奨学金作曲家として招待され作品発表。2005年ガラルド・オーシタ助成金と共にカリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデント。世界各国の教育機関でスペクトラルミュージックと自作について特別講演。現在、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学非常勤講師。



大村久美子（作曲家）

Kumiko Omura (composer)

東京芸術大学作曲科にて、浦田健次郎、松下功、近藤譲の各氏に師事。1994年に入野賞を受賞、受賞作「Reticulation」は、佐渡裕指揮の新日本フィルハーモニー定期演奏会にて初演される。また、同作品はウイン・モーダーン・マスターズ審査員推薦曲にも選ばれる。翌年よりドイツ・エッセンのフォルクヴァング芸術大学にて、作曲をニコラウス・A・フーバー氏に、電子音楽をルドゥガー・ブルュンマーの各氏に師事。その間、オランダのガウデアムス作曲賞グランプリ(1998)、ドイツのハノーファー・ビエンナーレにおいて最高位(1999)、ドイツ・ノルドラインウェストファーレン州若手芸術家奨励賞(2000)、ACL 入野義朗記念作曲賞(2000)を受賞。2000-1年には、パリの IRCAM(フランス国立音響研究所)にて電子音楽の研鑽を積む。作品は、ヴィッテン音楽祭(ドイツ)、アゴラフェスティバル、Centre Acanthes(フランス)、ブルーデンツ現代音楽祭(オーストリア)、Musiana1995(デンマーク)、ガウデアムス音楽週間(オランダ)、ICMC 国際コンピューター音楽会議 2000(ベルリン)などの、ヨーロッパや日本の各地の音楽祭にて演奏されている。また、2004年に武生国際フェスティバルにて初演された「Luminous Spiral」が武生作曲賞を受賞した。西ドイツ放送局委嘱作「Synapse」がヴィッテン音楽祭ドキュメント CD、「イメージの錯綜」が斎藤貴志サクソフォーン作品集 CD(AM Record)、「Double Contour」が Computer Music Journal の DVD(MIT,アメリカ)に収録されている。

個人サイト:<http://www13.plala.or.jp/kumiom/>

<協力スタッフ>

舞台：牛島安希子、大村久美子、高瀬屋有美子
音響：日栄一真、山口剛
会場：岩田典子、土屋美沙、服部綾奈

主催 : *NymphéArt*(ニンフェアール) / (財)名古屋市文化振興事業団

協賛 : 2005国際芸術フェスティバル協議会メセナネットワーク

三菱重工株式会社、三精輸送機株式会社、ヤマハサウンドテック株式会社、株式会社コトブキ、

カヤバ工業株式会社、東芝ライテック株式会社、パナソニック SS マーケティング株式会社、

丸芝電機株式会社、特定非営利活動法人世界劇場会議名古屋

後援 : 名古屋芸術大学音楽学部、日本作曲家協議会

協力 : テレビマンユニオン

